

モザンビーク国ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発プロジェクト

<2007年3月～2010年3月>

農業の概要と国内格差

アフリカ大陸の南東部に位置するモザンビークは、2,400 kmに及ぶ長い海外線を有する南北に長い国です。南部は亜熱帯圏、中・北部海岸線は熱帯圏、西北部マラウイ寄りの地方は高原性の冷涼気候帯にあたります。国土の大半が年600mm以上の降雨地帯にあります。3,600万ヘクタールに及ぶ耕作可能地を有しますが、実際の耕作面積はわずか400万ヘクタール強に過ぎません。主な作物はトウモロコシ、米、ソルガム、ミレット、キャッサバで、これら主穀類、芋類の単位面積当たりの収量は周辺アフリカ諸国と比べて低位にあります。

中・北部に1,000mm以上の降水量がある農業ポテンシャルの高い地域がありますが、道路が未整備であることと、南部で頻繁に起る旱魃の影響もあり、容易に自給を達成することができず、長年にわたり食糧援助の受け入れ国になっています。特に米については近年の消費の伸びに生産が追いつかず、自給率が減少傾向にあるのが注目されます。国内で可能な範囲で米の増産をまず達成することが、道路網の整備とともに緊急の課題となっています。

モザンビークは首都圏と地方部の経済・社会インフラの格差が極めて大きい国です。この格差のために、政府機関に勤める高い教育を受けたエリート層が首都を離れて地方に勤務したとらないという傾向があり、地方行政能力の強化が遅々として進みません。行政の小規模農家支援が行き届かず、開発の恩恵を多くは受けていないため、この国の小規模農家は周辺諸国と比べても営農キャパシティ、技術力が脆弱です。80%以上の労働人口を抱える農村部へは、技術協力による農業開発支援が重要なテーマと考えられますが、16年以上に及ぶ内戦の影響で蒙った社会・経済インフラのダメージが今も残っており、農業開発上の大きな障害となっています。



小規模農家の現状と発展の糸口

総人口のおよそ6割が農村に住みます。大半が、一戸当たりの平均耕作地が1.3ヘクタールほどの小規模農家です。肥料、農薬はほとんど未使用、機械と役牛の使用率が低く、灌漑地の面積もその利用も充分ではないため、周辺諸国と比べて農業生産性が低く、この小規模農家が営農を拡大発展させる力に欠けます。貧弱な農村インフラ、耕作放棄による土地、土壌の劣化、過少な耕作用役牛数など内乱の後遺症も残っています。



農民へのアンケート調査 2007年

小規模農家の営農の現状に立脚した技術開発支援と大規模農家向け機械化農業とは異なる取り組みが必要です。たとえば、小規模農家向けの栽培技術・農作業技術の開発と普及、小規模農家に有利な農業への転換、灌漑地の効率的な利用、そして小規模農家に対する精米流通、マイクロクレジットなどの支援が、現状を打開に導くアプローチになると考えられます。そして、行政・研究機関から小規模農家への技術と知識の伝達が必ずしも円滑ではないため、この隔たりを埋める人材の育成と訓練が先行されるべきで、ここに人を介する援助、プロジェクトによる技術協力の必要性和重要性が指摘されます。

「ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発プロジェクト」は、2007年3月から2010年3月の期間に実施された、モザンビーク南部ガザ州のショクエ灌漑スキームにおける、小規模農家を対象とするJICAの技術協力プロジェクトです。目的は、営農支援体制の整備、小規模農家に適した農業技術の開発と普及、灌漑水路を管理する水利組合の組織強化と水管理技術の向上を通じて、小規模農家の生産と生計を向上させることです。



モザンビーク・シヨクエで農業開発プロジェクトが始動

南部ガザ州シヨクエ郡のリンポポ川右岸に沿って広がるシヨクエ灌漑地区は、国内最大規模の灌漑地で、かつては年に10万トンを超える米を生産していました。1975年に独立して後の経済体制の変遷と1980年代の内戦の影響に加え、2000年のリンポポ川の大洪水により、灌漑地区の機能が著しく傷つき、現在の生産量はかつての10分の1以下に落ち込んでいます。

灌漑地区の水供給と一次水路までの水配分をシヨクエ灌漑公社が受け持ち、二次・三次水路の維持管理は水利組合が責任を持つことになっています。小規模農家が耕作する土地は地区内可耕面積のおよそ半分を占めますが、水資源の有効活用、灌漑施設の維持管理、効率的な営農などの面で多くの課題があります。また、投入すべき農業資機材、小規模農家向け金融および農産物市場へのアクセスなどの面でも困難な状況にあります。

モザンビーク政府は、これらの問題を解決し、灌漑地区内小規模農家の生計向上を図るため、日本の支援を得て技術協力プロジェクトを開始しました。主要な協力分野は、灌漑水管理、営農および普及・訓練の三分野で、アールディーアイはこのうち営農および普及・訓練分野を担当する技術者を派遣しています。第一年次の現地活動が2007年3月から7月までの間に実施され、三分野に加えてベースライン調査も行われました。ベースライン調査は、灌漑



精米所で働く主婦 2007年



稲の脱穀・風選 2007年



灌漑水路の修復作業 2007年

地区内小規模農家の灌漑営農と農村生活の実態を調査・分析して、プロジェクトの詳細活動計画の策定のために資料とデータを提供し、また、プロジェクト実施後の評価の指標を得るための作業です。9月から第二年次の現地活動が始まりました。

「アールディーアイ通信第31号 2007年10月15日」
から

ガザ州・シヨクエ郡のプロフィール

小規模農家対象の農業開発プロジェクトが進行中であるシヨクエ郡の、人口、交通の便、保健・衛生、教育について、州と郡の報告書や UNDP の資料を使って紹介します。

シヨクエ郡は州の 11 の郡のひとつで、源流が南アフリカにあるリンポポ川が郡の北側を南東方向に流れ、面積は 2,466 km² (佐賀県ほど) です。1997 年の推定人口約 21 万 4 千人の 7 割が地方部に居住し、世帯数は 4 万 3 千戸です。郡庁のあるシヨクエ市の人口は 6 万 1 千人で、街の中心部は人口のわりには繁華な印象を受けます。郡人口の 34% が就業していて、就業先は、82% が家族農業の一員となっているか、農業労働者です。世帯の 60% が貧困層に属し、全所得の 48% が食費に費やされています。

首都マプトまでの約 220 km、州都シャイシャイまでの約 120 km をはじめ、シヨクエと主要都市との間の旅客輸送の大半は道路交通です。国内の長距離バスサービスは充実していて、隣州やマプトへは毎日便があります。南アフリカの長距離バス会社が、シヨクエからマプトを経てヨハネスブルグや鉱山に近い町まで直行サービスを提供しています。ガザ州を含むこの国の南部の州から南アフリカの鉱山地域へ、出稼ぎ労働者が多いことの反映です。

保健所の建設を鋭意進めていて、当面、人口 1 万人に 1 ヲ所を目指しています。主な疾病としては、マラリアが圧倒的に多く、下痢、赤痢、性病、結核がこれに次ぎます。マラリア予防対策として、過去に配布した薬剤処理蚊帳の再薬剤処理を進めていて、2006 年までに 76% の再処理を終えたそうです。

地下水を水源にして給水する水道水が郡の 25% の家庭に届きます。2000 年に起きたリンポポ川の大洪水後、シヨクエ郡の村落部に、公的および NGO の国際協力によりポンプ付きの共同井戸が多数設けられてきたため、25% という数値以上に多数の郡人口が、水道給水ではないものの飲用に地下水の供給を受けています。

小学校は 5 学年までの第 1 レベルの学校と 6 および 7 学年がある第 2 レベルの学校があります。中学校も第 1 レベル

農作業の合間に一休みする女性たち 2007 年



シヨクエのバスターミナルで荷物を積むトレーラーを牽引するバス 2007 年



首都マプト 2008 年



(8から10学年まで)と第2レベル(11および12学年)の学校が各1校あります。郡の総計96の学校のうち、85校が小学校第1レベルです。教育機関としてほかに、農業の基礎を学ぶ基礎技術訓練学校、高等教育機関としての農業大学と教師育成学校があります。

5才以上の郡人口の半数が未就学者で、その65%が女性です。児童、特に女兒が就学年齢をだいぶ上回ってから小学校に入学する傾向があります。識字率は42%ですが、女性に限ると36%です。学校教育はポルトガル語で為され、5才以上の人口のおよそ半数がポルトガル語を話し、ポルトガル

語を話さない人口の7割が女性です。(2007年8月)



卵を売る少年たち 2008

日本からモザンビークに帰国した研修員にインタビュー

「モザンビーク国ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発プロジェクト」のプロジェクト・マネージャーであるアデリト・マビエさんは、JICA 研修員受入事業による日本での研修に参加し、2007年11月から12月まで筑波国際センターで実施された「農民参加による農業農村開発」コースに参加した。業務調整員である興村暁子が、日本や日本人の印象や見聞、体験したことなどについて聞いた。

—訪日前に持っていた日本に関する知識と滞在して得た認識との相違は？

これまで、日本の食文化は異質でありよいものを食べているイメージがなかった。例えば、カエルや蛇を食べているのではないかと思っていた。ところが滞在して分かったことだが、食文化が驚くほどに発展している。美味しい食べ物がいっぱい。感動的だった。ご飯の味は特に素晴らしい。ただ、味噌汁は飲めなかった。

—滞在中に観察し、考えた日本人の生活習慣について、良くも悪くも。

時間に対してとても厳格だ。決められた時間通りに会議が始まる。緑茶を飲む習慣はすばらしいと思う。健康に対する効果を聞いて優れた飲み物と思うが、味もたいへんいい（マビエさんは滞日中にお茶と急須を購入した。買ってきた緑茶がなくなったらどうやってモザンビークで購入すればいいか、今から心配しているようだ）。ご飯を朝食に食べるのは信じられない習慣だ（モザンビークでは、朝は飲み物程度で済みます。朝食をしっかり食べる習慣がなく、日本人が朝からご飯を食べるのは異様に見えたようだ）。

—滞在中に理解できた日本人の価値観について。

家庭や仕事に対する姿勢が違いすぎる。何時間もかけて通勤したり、家族より仕事を優先するなど、モザンビーク人とはかなり異なった価値観で生活を送っている。こうした姿勢や社会環境から、少子化も十分理解できる。

—異文化理解、文化交流あるいは国際化に対する日本人の認識について。

外国人に対してとても視野が狭い。閉鎖的なところが感じられた。うかつには話しかけられない雰囲気の人が多い。つくばで出会った一人の女性は異なり、とても親切で開放的なひとだった（プラネタリウムを案内してくれたそう）。そのひとは外国留学の経験があり、外国人に対する感覚がほかの日本人と違っていた。多くの日本人とは交流がむずかしく、研修中の週末はどうして過ごしてよいかわからなかった。

—よい印象悪い印象、よい経験悪い経験を。

電車の中で携帯電話や携帯ゲーム機を使用しているひとが大勢いて、異様な光景に映った。筑波国際センターに研修員などが贈った各国の民芸品が展示してあったが、その民芸品に対する説明がほとんどなく、不親切な印象を受けた。農地が都市部のすぐ近くにあるのがよい意味で印象深かった。

（興村暁子 2008年3月8日）

モザンビークの技術協力現場を訪ねる

アールディーアイが JICA との業務実施契約によりモザンビークで実施中の農業開発プロジェクトに、緑地・環境学を学ぶ大学 4 年生お二人が訪れ、農村生活と開発協力事業の実情、そして近隣地域で農村開発分野の技術協力に従事する青年海外協力隊員（以下、協力隊員）の活動を見てきました。広報部がインタビューしました。



街路樹が美しいショクエの街

2008 年

地平線がどこまでも続く広大な台地と大きな空に魅了される。「アフリカ、すごい!」。水田の風景がしばらく続いた後でショクエの町に入る。メインの通りの両側に街路樹が植えられ、色彩豊かな建物が目に付き、ポルトガル風に見える美しい建物も残っている。途上国らしい町に着いて、いつもそうだが、時間に追われていない、ゆったりとした時の流れを感じる。

ショクエの町の外側に広がる灌漑地区の一部が、「ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発計画」という技術協力プロジェクトの対象地域になっている。プロジェクトの田村政人総括と興村暁子業務調整員に連れられ、現場見学に出る。以前から「アールディーアイ研究会／勉強会」への参加を通して、また、田村さんが帰国中に直接話を聞いて、少しは知識を持って現地見学に臨んだ積りだったが、想像を遙かに超える灌漑地の広さに驚く。稲が青々と元気よく生長し、終わりの見えない水田の美しい光景が続く。日本のものと同じカカシが立っていることへの小さな驚き、向こうの田との間に植えられたバナナやサトウキビを目印に区画の大きさを実感。一緒に見学する稲作の普及活動をしている協力隊員は、農民を巻き込んで栽培規模を上げる難しさを痛感していて、モデル稲作地区の面積を将来さらに拡げることが目標というプロジェクトに、「そうなれば奇跡に近いくらいすごいことだ!」と唸る。

農家の人を招いて行う意見交換会の様子を見学。言葉はわからないが、協力隊員に通訳してもらい、厳しいやり取り

2008 年 2 月 24 日から 3 月 11 日までの約 2 週間、「日本人が携わる開発協力の現場を見る」と同時に「途上国の人々の生活を知る」ことを旅の主な目的に、新田絢香さんと輿水進さんがモザンビークを訪ねた。アフリカ訪問は初めて。本やガイドブックなどからの「怖い、危ない」という印象は、首都マプトに到着したその日に払拭。技術協力プロジェクトの現場、約 200 キロメートル離れたショクエという町へ移動する車窓から見たマプトの中心街は、高層

の建物が並び、たくさんの乗用車が行き交う近代的な大都市。街を抜けると、日本ではなかなか見ることのできない、

地平面がどこまでも続く広大な台地と大きな空に魅了される。「アフリカ、すごい!」。水田の風景がしばらく続いた後でショクエの町に入る。メインの通りの両側に街路樹が植えられ、色彩豊かな建物が目に付き、ポルトガル風に見える美しい建物も残っている。途上国らしい町に着いて、いつもそうだが、時間に追われていない、ゆったりとした時の流れを感じる。

ショクエの町の外側に広がる灌漑地区の一部が、「ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発計画」という技術協力プロジェクトの対象地域になっている。プロジェクトの田村政人総括と興村暁子業務調整員に連れられ、現場見学に出る。以前から「アールディーアイ研究会／勉強会」への参加を通して、また、田村さんが帰国中に直接話を聞いて、少しは知識を持って現地見学に臨んだ積りだったが、想像を遙かに超える灌漑地の広さに驚く。稲が青々と元気よく生長し、終わりの見えない水田の美しい光景が続く。日本のものと同じカカシが立っていることへの小さな驚き、向こうの田との間に植えられたバナナやサトウキビを目印に区画の大きさを実感。一緒に見学する稲作の普及活動をしている協力隊員は、農民を巻き込んで栽培規模を上げる難しさを痛感していて、モデル稲作地区の面積を将来さらに拡げることが目標というプロジェクトに、「そうなれば奇跡に近いくらいすごいことだ!」と唸る。

農家の人を招いて行う意見交換会の様子を見学。言葉はわからないが、協力隊員に通訳してもらい、厳しいやり取り



意見交換会 2008 年

がなされる緊迫した場面を目の当たりにして、農民の理解を得る難しさを知る。このような集会を催し、農民に来てもらうのも一苦勞で、昼食を用意したり、あの手この手で工夫を凝らしている裏方の実情も垣間見て、技術を伝えるだけではないたくさんの苦勞があることを知る。技術協力の実施には想像し難い苦勞があるだろうけれど、それが成功すれば、農民に限らず現地の多くの方たちに多大な影響を及ぼし、生活が改善することを期待できる、と言う協力隊員の言葉に同感する。

モザンビークに派遣中の協力隊員の間では、日本から学生2人が訪れることがプロジェクトを通じて知られていて、話題になっていたとか。隊員同志は互いに連絡をよく取り合い、情報交換が盛んに行われている。別の協力隊員を次々に紹介してくれて、訪ねる先々で案内役を快く引き受けてくれる。短い期間で20人ほどの協力隊員に会うことができ、協力隊員のプロフィールや隊員活動のやりがい、さまざまな生活の苦勞話を聞く。小さい頃からの夢である協力隊員になることを就職で一旦は諦めたが、夢を捨てきれず会社を辞めて挑戦した人、現役教師で休職して来ている人、幼い頃から親の転勤で様々な国で育ち、語学に堪能で現地の言葉もすぐに習得して話せる人、誰かのために自分でやれることをするためにやって来たと言う、熱い人など、個性的な人達が多い。トイレが屋外にあり、共同使用で、モルタル壁の立派な囲いに覆われてはいるものの、肝心のトイレは地面に穴が掘ってあるだけという生活環境で暮らす人、知る人誰もが羨む何部屋もある豪邸に住む人、同じ国の協力隊員でも実に多様な環境で生活している。

協力隊員にモザンビーク人の印象を聞くと、必ずしも良い答えばかりが返ってくるわけではない。2週間という短期間の訪問者にとって、モザンビーク人はまぶしい笑顔で人懐っこく接してくる親しみやすい人たち。だが、半年以上も仕事と生活を経験した協力隊員の目には、時間にルーズであったり、約束を守らないこともあるという異なる面も見えてくる。日本人の生真面目さにあらためて気付かされることもある。住む家に来ることになっている電気がなかなか来ず、工事を再三お願いしても半年以上放置されたまま苦勞している人もいる。憧れだけでは暮らせない、現実の話聞く機会に恵まれる。

ある協力隊員が活動するシプトという町を訪ねる。村の人たちの生活の場に入らせてもらい、子供たちと触れ合い、食事を一緒に作り、ともに食べることを通して感じた率直な感想は、「皆とても楽しそう」ということ。遠く20分もかけて行く水汲みは子供達の役目でもある。日本で想像したのは、過酷な重労働で女性や子供にとって大変な負担。実際に目にしたのは、水汲みは日常生活の一環で、少女たちが連れ立ってワイワイと話しながら往復する。一家団欒のように家族皆で水汲みする光景。確かに重労働であるが、それが楽しそうに見えることに驚く。水汲みだけではなく、過酷な生活状況の中でも穏やかでニコニコしている。とても貧しそうなお家を訪れた時、日本から来たと紹介された学生を快く迎え入れ、家族の分は後回しに、「食べていって」と食事を勧めてくれる温かさに触れ、嬉しさに満たされる。



水汲みをする少女たち 2008年

途上国での技術協力を携わりたいという意志を持つ二人が、実際に技術協力の現場を見て、現地の人と触れ合い感じた事、考えた事。表面的な部分しか見ていないかも知れないが、外の世界を知らず、貧しいことを当たり前のように生きている人たちの生活を見てきた。一概に日本側の観点で物事を見ることはできないと感じる。いくら良いと思っていることでも、現地の人を理解できなければ良いということが通じない。笑顔で幸せそうな顔をして暮らしていて、不満を口にする人もそうはいない。貧困をなくす努力は続けなければならないが、貧しいから直ちに可哀相だとは言えないようにも思える。開発協力はどこを目指してやるのか。日本の生活水準を念頭に、比較して、目指してやるものではないであろう。技術協力を押し付けで行うのではなく、現地の人々が望んでいることが何なのかをよく見極めて、その上で内容や方法を考えなければいけない。そして、現地の人に理解を得られるような形で進めることが重要だ。(新田絢香さんと奥水進さんはいずれも千葉大学園芸学部緑地・環境学科の4年生。入学前から国際協力、開発協力、開発途上国に強い関心を持ち、留学生支援会で途上国からの学生との交流を長く続けている)

「アールディーアイ通信第36号 2008年8月15日」から



協力隊員の職場の小学校を訪ねて
2008年

青年海外協力隊事業は、開発途上国に対する技術協力の一環。1965年に開始され、途上国において現地住民と生活と仕事をともにし、その地域の経済・社会の発展に協力しようとする青年による海外ボランティア活動。派遣業種は、農林水産、教育、土木建設、保健衛生などの分野で160以上。JICAのホームページによれば、2008年3月までに82カ国に累計31,000名以上が派遣された。モザンビークへの派遣は、2002年の派遣取極以降2008年まで累計90名で、現在35名(うち17名が女性)が活動に従事。
(広報部)

モザンビーク・ショクエの技術協力プロジェクトー最終年次にむけてー

2006年3月に始まった農業開発プロジェクトは、最終年次（第4年次）の活動が2009年5月に始まり、2010年2月で現地業務をすべて終了する予定です。

小規模農家への総合的技術支援としての稲作技術の実証、指導および普及、モデル灌漑圃場の設置、精米機のモデル操業、畜力による農作業の推奨などの主な活動については、第3年次現地業務期間（2008年5月～2009年2月）中に予定通り終了させました。精米機モデル操業から得た収益をマイクロクレジットの資金にして、モデル水利組合員に営農資金として貸し付けたことにより、モデル圃場の作付面積がかなり増えました。また、モデル圃場ではプロジェクト開始から2回目の稲の収穫が終了していますが、稲作技術の普及により、収量が昨年度を上回っているようです（現在精査中）。精米機モデル操業では、収穫され、精米されたお米の販売ルート開拓、健全な組合運営のための組織作りなど、まだまだ乗り越えなくてはならない問題が山積みですが、今年度の収穫には希望がもてるようです。

昨年度に実施されたプロジェクトの中間評価では、プロジェクトの成果として妥当性、有効性、効率性とインパクトについてはほぼ目標を達成しているが、唯一自立発展性が不十分との指摘がありました。この提言で、最終年次は、プロジェクト活動で日本人技術者が主導的役割を果たすような場面を少なくして、目標を、モザンビーク側担当者であるカウンターパートや実施機関の指導者の自主的活動の取り組み姿勢を引き出すこととしました。慢性的な予算不足から、普及員の給料は遅配気味であり、事務所の電気代不払いから通電停止がしばしば起るといった状況の下、車両燃料費などの活動経費不足により、モザンビーク側担当者に活発な自主的活動を求めるのは至難の技と思われます。プロジェクトでは、カウンターパートや農家のやる気スイッチをなんとか見つけて、スイッチが継続的に“ON”になるようにしたいと願っています。

希望の花のつぼみは着きました。最終年次の残りの期間、泣いて、笑っていつの日にか、きっときれいな希望の花が咲くものと信じて活動します。（業務調整／興村 暁子）

「アールディーアイ通信第42号 2009年8月15日」から



田植えは女性たちの仕事 2008年



杵と臼でトウモロコシや粉を搗く
2008年

モザンビーク・ショクエでの技術協力プロジェクトを終えて

モザンビーク南部のリンポポ川下流右岸に沿った灌漑地区で、2007年3月から実施されてきた小規模農家を対象とする農業開発プロジェクトが2010年3月に終了しました。アールディーアイは、(株)日本開発サービスとともにこのプロジェクトの実施に携わり、終了時に、小規模農家の農業生産性向上というプロジェクト目標の達成に加え、様々な好ましいインパクトを与えたと評価されました。

終わってみればよい評価を得られたプロジェクトですが、開始当初はJICAの技術協力についてモザンビークではよく知られていなかったため、技術協力プロジェクトの趣旨、目的、手法などを正しく理解してもらえませんでした。灌漑地区の農民に農地の管理権を奪われるのではと疑われて、プロジェクトに協力しながらない農家の説得に時日がかかったり、農業普及員から本来プロジェクトが支払うものではない、プロジェクト活動に参加したための日当などが払われないと抗議を受けたりしました。

プロジェクトが始まってしばらくは、技術研修会に農家がなかなか参加してくれず、仕方なくやらされているよう

な様子がありました。後半になって、稲作収入が増大した農家や、試験的に精米した白米の売れ行きを目のあたりにして、稲作農家の取り組み姿勢がかなり変わりました。農家が灌漑稲作について話し合う会議に今まで参加したことのなかった農家の参加を見たり、意見の衝突がよく起こるようになったり、発言の少なかった集会で色々意見を述べる農家が増えたのは、大きな変化であると思っています。長期短期に参画した6人の日本人技術者をはじめ、プロジェクトに参加した関係者の努力の結果です。農家の人たちの急には変わらない生活と仕事のペースの中で、限られた期間で一定の成果を出すことの難しさを実感した3年間でした。

ショクエを後にする数日前、プロジェクトが支援した営農グループの中心メンバーと、青々と茂る稲田を歩いていたときの事です。プロジェクトは終了し、これから彼らだけで乗り越えなければならない多くの問題をどうやって克服するのか不安でいる私に、メンバーの一人がまもなく開花する稲を見渡しながら、「ここに私達の未来が育っている。心配することはないよ」と突然言いました。心配せずにはいられないのですが、今年の豊作を確信できる農民の自信と希望を感じて、ひとまずは気持ちよく日本へ発つ心の準備ができました。水利組合に最後の業務引継ぎと支援資機材の引渡しを行った日、中心メンバーからプロジェクト支援に対するお礼であると、鶏をプレゼントされました。こ



田んぼでは野鳥をよく見かける
2008年



ドラム缶に稲を打ちつけ脱穀作業
2008年



シヨクエ市内の精米所 2008 年
子どもたちも袋詰めを手伝う

の鶏は雄鶏で生きたまま足を縛られ、喚いていました。私にとっては微妙なプレゼントでしたが、その誠意と謝意の表現に感激しました。

業務を終えて帰国した日本で、忙しく収穫作業をしているであろうシヨクエの稲作農民を思い浮かべ、来年も再来年もその光景が続くように願っています。

(業務調整／興村暁子)

「アールディーアイ通信第 46 号 2010 年 4 月」から